

春秋

2012.10.22

88歳で豆紙人形作家としてデビューした北九州市出身のマサコ・ムトーさん（本名・武藤正子）の遺作展が東京で開かれると、5月に書いた。その後、

次女で作家のヒロコ・ムトーさんからうれしい便りをいただいた▼大正時代の子どもや地元の祭りなどを題材に、重い病の床で小さな紙を折り続けたマサコさん。それを小欄で知った会社員2人が、出張のついでに会場に立ち寄ってくれたそうだ。

福岡の母親から新聞の切り抜きが送られ、代わりに見に行くと頼まれた娘さんも。ヒロコさんは「故郷の方に見ていただき、母も喜んでいてしよう」と話していた▼会場には他にも目を引く展示があった。マサコさんが病室の窓から見える西の空を、毎日のがきに水彩で描いた絵日記だ▼あかね色、薄紫、銀ねずみ色、群青色、ナス色、燃える赤。刻々と変わる空と雲の姿をやさしい筆がとどめる。「同じところの雲ですのに／毎日違った景色になるのが不思議ですね」「神のなし給う美術／毎日夏の空が描ける楽しみを感謝します」。絵には日々の思いが添えられている▼片方の視力を失い、心臓、肺、肝臓などの重病に苦しんだ。しかし、絵日記には病気のつらさではなく、一日二日を生き、自然の美しさに感動できる幸せがあふれている。マサコさんの作品24枚を収めた「雲日記」（海竜社）が出版された。心が暗い雲に覆われそうなとき、手に取ってみたい本だ。